

第11回 登別市中小企業地域経済振興協議会 議事録

平成26年10月30日(木) 18時30分～

登別商工会議所 会議室

- ◆出席委員：齋藤 正史 委員
 - 川田 弘教 委員
 - 望月 一延 委員
 - 守屋 聡 委員
 - 近井 一夫 委員
 - 安達 信喜 委員
 - 藤田 康 委員
 - 吉元 美穂 委員
 - 垣内 登紀子 委員
 - 安達 陽子 委員
 - 千葉 洋子 委員
 - 沼田 一夫 委員
 - 松山 哲男 委員
 - 井上 昭人 委員
- 計14名

- ◆事務局：商工労政グループ伊東商工労政・新エネルギー主幹
竹中担当員

- ◆登別商工会議所事務局：田村事務局長

- ◆議題：【登別市における各産業分野の現状把握】

- ◆講話者：伊達信用金庫 理事長 舘崎 雄二 氏

光客は減っているものの、外国人観光客が増加傾向にあり4割を占めている。円安等の外部環境の影響は大きいものの、震災後の客入りが確実に良くなっている。我々のエリアには、洞爺湖温泉や伊達市の道の駅、壮瞥町の昭和金山などの資源がある。

1市3町の動向を見ていると、洞爺湖温泉においては、客入りが良かったとしても泊まるだけの人が多い。伊達市の道の駅においても、野菜等を購入したら終わりである。この事態は非常にもったいないと思っていた。ご当地・観光地にお客様がたくさん訪れているにも関わらず、近隣の地域にお客様が全然回っていない。

そこで、平成25年度から市や商工会議所と共に、域内により多くの観光客を回せないだろうかということ話し合った。信用金庫は地元に着した金融機関であるというところから、狭域の中でどの様なことができるかを考え、まずは地元の商工会議所や商工会と産業振興に関わる業務連携協定を結んだ。これは、商工会議所や商工会の会員と金融機関の顧客がほぼ同じというところから、手を組んでお客様が悩んでいることや問題・課題としていることを一緒に解決しようというものだ。地方では企業がきちんと運営できていなければ、地域の問題は解決できないだろう。経営者にうまく運営してもらう為には、我々金融機関が手を尽くさなければならない。併せて、商工会議所や商工会と手を結んで手当てをしていくことが基本的な部分として大事なことになる。

次に、1市3町の広域での連携についてはどの様にしたら良いのか。まずは1市3町がまとまっていくことが大事だろうと思い、10月23日に『地域活性化に対するブランド戦略』と題して、札幌からコンサルタントをお呼びしセミナーを開催した。それぞれの市町に強みがあっても、それがまちの中だけで消費されてしまっている為、手

を結び外部のお客様に来て頂くことを優先に考えた。域内の消費は人口減少等で減っていく一方である為、いかに外貨を稼ぐかが重要となる。

現在スマートフォンの利用が主流となっているが、外国においても同様で、今の時代は大抵の人がスマートフォンから情報を得ている。この時代の流れにより、登別温泉ではW i - F i が整備され、洞爺湖温泉でも来年の整備に向けた動きが始まった。このW i - F i の整備の意義はどの様なところにあるのか。それは、建物の中で繋がるのではなく、人が集まる一定の域内に入ったら自動的に無料でその場所の情報が入り、近隣の情報が入ってくるようなところにある。その様なコンテンツをきちんと作成し、その場から情報を求めている方々に情報提供する必要があると考えている。

W i - F i の長所は無料だという点である。外国人は有料をととても嫌う為、無料で情報提供するこのコンテンツはとても有益なものになるだろう。これを1市3町の商工会、商工会議所、行政で手を組んでやっていこうという話になっている。ここでも行政区の壁があり、なかなか話が進まなかったが、ようやくW i - F i の環境整備の下地ができつつある。

こうなると今度は観光客を受け入れる側の創意工夫が求められてくる。全然知名度はないが、実は伊達市でもA5ランクの和牛を育てている。ほかにも、壮瞥町には神戸牛の素となる奥洞爺牛、旧洞爺村（現洞爺湖町）では赤毛和牛がいる。この様にそれぞれの土地に優れた和牛がいるが、地元の人すら知らない。これらを利用し、有珠山の溶岩を使ってプレートを作り、その上でこれらの和牛を焼き、食べ比べするイベントを開いてみるのはいかがだろうか。それぞれでPRはしているものの発信力が足りない為、1市3町で手を組んで広めていこうと思っている。人が集まる様な仕組みさえ整えば、新規創業なども出てくるのでは

ないだろうか。

この仕組みの整備は行政の補助金などの力も借り、1市3町の取り組みとして始めていこうと思っている。現に洞爺湖温泉では観光客が増加している為、新規参入店舗も立ち上がっている。そこにも我々が関わっており、資金面だけではなく事業計画の立案や人的サポートも支えている。我々は人材の資源が十分ではない為、連携している所から無料で希望の人材を派遣してもらっている。年間で10人程度派遣できる。これをフル活用し、それぞれの魅力を引き出すサポートをしている。情報がスマートフォンから入れば、域内の観光経済も回る為、まずはWi-Fiの環境整備を是非とも早く進めたいと思っている。

登別・室蘭はまちづくり放送株式会社が早くに開局した。伊達市においても来年3月から開局する。現在は大抵の人がスマートフォンやコミュニティーFMから情報を得る時代だ。これらをこつこつやっていき、1市3町を連携してブランド化し、外貨を稼いでいきたい。

この様に、1市だけでは弱い部分を近隣で連携していこうというのが、今日私が伝えたかったことだ。本日の協議会のメンバーを見させて頂くと、非常に理想的なメンバー構成になっていると感じた。登別・室蘭において私が感じたのは、距離的な問題もあると思うが、個々の地域が分断されている様に感じた。例えるならば1市3町の状態である。登別市は行政区の壁が無い分交流がしやすいと思うが、地区ごとの目立った交流がなかなか見られない。取りかからなければならぬ課題として似ていると思った点は、登別温泉にあれだけの観光客が来訪していることを、どの様に幌別地区や鷺別地区に持っていくか。観光客や他地域から来訪される方々が、単に登別温泉での入湯だけが目的ということではなく、登別の他の魅力を発見して楽しめることが、地域が連携するとい

う事だと思う。その様なことから経済的なメリットが無ければまちづくりはうまくいかないと感じた。

行政において、アベノミクスの第三の矢の成長戦略で地方創生本部ができ、確実に地方への補助金、まちづくりや中小企業への支援のメニューが増えると思われる。成長戦略の中でようやく地方に目が向いている。地方に向けられたお金は有効に使うべきだ。ただ、経済産業省や総務省から出ている補助金は手元に入ってくる情報が少なく、利用することが困難である。行政は情報を噛み砕き、わかりやすい情報として発信して頂きたい。平成26年4月、我々と商工会議所等で、企業に合った支援メニューや補助金の情報を探し、その情報を発信するチームを作った。情報発信はとても難しいだが、そこで大事になってくるのが我々や行政、商工会議所の三位一体の取り組みが重要になる。補助金を経済効果に変え、お客様が増える。ここまでの流れで初めて結果が出たことになると思っている。

先日参加したセミナーで、講師の方に「他の地域の中で同じ様に行政と金融機関、会議所などが手を組んだものの中で成功したものは無いのか」と聞いたところ、「ふるさと納税(ふるさと寄付金)をうまく活用し近隣の市町村と合同で、名産品とをプレゼントしている地域がある」と話していた。この取り組みがとても好評で、税収が何倍にも増えたそうだ。また、同じセミナーで、「地域活性化に必要な物は『若者、馬鹿者、よそ者』だ」という話をしていた。若者が自分のまちについて考え、馬鹿になって取り組んでいくという意味。『よそ者』は、他地域の人気持ちになって自分のまちについて考えるということ。まちの魅力について考えた時に、住んでいると気づけない部分が多々ある為だ。私の最終目標は、1市3町の取り組みを成功させ、洞爺湖温泉と登別温泉で交流を深め、

会 長	<p>オール胆振で世界に発信していくことだ。</p>
委 員 講 話 者	<p>1市3町においても登別市においても人口減少や地域経済の経過は変わらないのだと感じた。考え方をまとめると、外貨稼ぎをしていく為の方策として、広域的な連携の必要性やW i - F iなどのI T関係の活用、人的サポートとして専門家の派遣をしていくということだと思う。どこを切り口に物事を進めていくのかが、我々に与えられた課題だと思っている。</p>
委 員	<p>では、質疑応答の時間を設ける。</p>
委 員 講 話 者	<p>W i - F i設備の事業について、設置位置や対象地域はこれから決めるのだろうか。</p>
委 員 講 話 者	<p>登別温泉とおそらく同様だろうが、洞爺湖温泉の一定のエリアに入るとW i - F iが利用できる予定だ。設置は来年である。</p>
委 員	<p>将来的には、更に拡大していく予定か。</p>
委 員 講 話 者	<p>構想では、有珠山や昭和新山、道の駅の様な、お客様の集まる場所にW i - F iスポットを設置したい。設置による費用について、調べてみるとW i - F iの設置に対する補助金があることがわかった。これを活用したい。</p>
委 員	<p>この事業自体は市や町がやるのだろうか。</p>
委 員 講 話 者	<p>1市3町でやっていくのは極めて困難なことだとは思う。しかし、以前有珠山が噴火した際に1市3町で作った『有珠火山防災会議協議会』というものがある。これを母体に防災を全面に出して緊急避難の連絡をW i - F iを使って広めるシステムを申請することはできるだろう。補助金では半分しか補助されない為、残りは自治体に頑張ってもらおう。そこをクリアできればハードの整備やコンテンツの整備もできる。三位一体でやらなければならないというのはこういうことである。</p>
委 員 講 話 者	<p>先ほど商工会や商工会議所や市と町で壁があるというお話があったが、その状態は今でも変わっていないのだろうか。</p>
講 話 者	<p>商工会と商工会議所の間では壁は無い。それは</p>

当銀行と連携協定を結んでいる為だ。市町村においては課長クラスで壁が生じている。ここが交わっていきそうで交わっていない。今は改善されてきているところである。

委員

W i - F i を使って観光や飲食業の事業者の考えや動きを周知等はしていないのだろうか。

講話者

今の段階でやっているのは、主に建設業である。財政面が大変ではあるが、機動的な財政政策により、それなりに公共工事がある。まず、我々の地域に1次産業が多い点を活かし、地元で獲れた物を活かし、その切り口で連携していくところから始めなければ、他の業種も一緒になってやっていくのは厳しいと思われる。連携するきっかけとしてまず成功事例を作らなければ、他の業種には手が出せない。

委員

飲食店や観光等の様々な業種の個々の事業者でそれぞれにまとまりはあるのだろうか。

講話者

私は無いと思っている。今の状態はW i - F i の環境等、切り口としては皆平等だ。お客様にたくさん来ていただく為の仕組みを作るのにまとまらない理由は無いのではないかと思う。何かをしようとする時に人が問題になるのはどこにおいても同じだとは思いますが、『腹を割って話すこと』が大事だ。ここから始まらなければ形式上のことばかり言い合い、わだかまりを解くことはできない。

会長

ここで、先の説明を聞き、問題・課題・今後のあり方等についてグループに分かれて話し合っていたら、グループごとに発表していただく。

委員

Aグループでは、企業が元気にならなければならないという話があった。事業者の立場からの意見として、元気になりたいと思っても、現状ではなかなかそうはいかない。

補助金については、短期間で集中的に助成金の案内が来る。先日、補助金の申請を行い、採択を受けた。北海道の企業では2社程度しか通っておらず、使ってもらいたいのだろうかけれども、申請

手続きの複雑さを考えると、使わせない仕組みになっていると思わざるを得なかった。

私の企業も展示会に出展する際に、様々な補助金を使っていかないと本当に大変な状況である。1つの展示会に出展するだけで20万円もかかる時は、単独で出展するとしたら、その元を取ることは困難だ。

先程の話の中で、室蘭商工会議所の方が助成金の案内と申請までをする組織を立ち上げ、企業に案内しているという話をしていた。その話を聞き、すごく良いものだと感じ、様々な企業に働きかけてもらいたいと思った。

登別といえば、やはり観光地である登別温泉が浮かぶが、登別温泉のホテルは観光客が来たら外に出さない仕組みになっている。その様な状況では、市民にまちの為に何かしてほしいと言っても、観光客が来てお金を落としてくれなければなかなか協力的な対応にはならないだろう。

登別駅のバリアフリー化やエレベーター設置を例に出すと、温泉側から「観光客が不便だから付けてください。」と言っても、市民の納得は得られない。だからこそうまく観光客に広く利用してもらえる様なシステムを作っていかなければ良い解決策にはならないだろう。

伊達の道の駅について、伊達にあれだけの人が入っている為、虻田・洞爺・豊浦の道の駅が非常に苦戦していると聞く。この行政区ではこの様なところから解決していかなければ協力的にはなっていないと感じた。伊達の道の駅は売上が好調である。売る側が道産品の良い物を提案しさえすれば、店に置いてくれる。今は地元の企業が地元のスーパーに物を置きたくても置けない状況だ。その様な背景がある為、道の駅の様な場所は地元の企業にとってはありがたい存在となっている。

Bグループでは、金融機関の基礎知識についての話があった。市民が起業したい場合に、どこに

委員

